

ルイス・タルク著

## 『虎に乗る男——一人のアジア・ゲリラ指導者の手記』

Luis Taruc, *He Who Rides the Tiger: The Story of an Asian Guerrilla Leader*, New York, Frederick A. Praeger, 1967, xxiii+188 p.

## I

ルイス・タルクの名前はフクバラハップ(抗日人民軍)の輝ける指導者として、フィリピン共産党の領袖としてあまりに有名である。かれは1954年の夏、政府軍に投降したが、それ以降、さしも隆盛を誇ったフィリピンの武装ゲリラ闘争も急速に凋落に転ずるに至った。タルクが政府軍に投降した理由は、いうまでもなくアメリカとの緊密な協力のもとに展開されたフィリピン国防軍の圧倒的武力にあったが、それと同時にフィリピン共産党指導部内における革命路線をめぐる争いの紛争に一因があったらしいことがかすかに伝えられていた。そして、その辺の真相は、局外者には永遠の謎として終わるかにみえたが、今回出版されたタルクの手記は、はしなくもこのへんの真相を白日のもとにさらけ出してくれることになった。

## II

1950年1月に採択された「1950年政治局決議」は、フィリピン共産党の指導下にあったフクバラハップの、その後の行動を規定するうえできわめて重要な決議であったといえる。この決議は、国際面・国内面に革命的情勢が存在すること、それは2年以内に「革命的危機」に達しようとする予想したうえで、フクバラハップは武装闘争手段によって1950～51年中に権力の奪取を図ること、その際の政治的目標と計画は、毛沢東流の新民主主義であること、解放運動において共産党の指導権を確立すること、さらに新しい政治情勢に対応して、フクバラハップを人民解放軍(Hukbong Mapagpalaya ng Bayan—HMB)に改組・改名することなどを規定した。この決議の最重点は武装革命方式にあるが、これを推進したのは知識階級出身の共産党書記長ホセ・ラヴァ(José Lava)であった。この決議に際して、ルイス・タルク兄弟は、革命的

情勢の認識は現実と合致せず、したがって、現在必要なのは広範なる統一戦線の結成であること、また解放闘争において共産党が指導権をとらんとすることは非現実的であり、愚かなことであるとして反対した。しかし、この反対は、常識的・直感的であって十分理論的でなかったために、ホセ・ラヴァの論理に打ち打ちすることができず、ついにタルク兄弟も屈伏せざるをえなかった。この決議によって、人民解放軍は共産党の鉄の指導体制(書記局にあらゆる権力を集中)のもとに置かれることになり、フクバラハップ司令官としてのタルクの地位もまた、名目的なものとなされたのであった。そしてタルクは、第2地区(主として中部ルソン)担当政治局員として、軍司令官として、同地区の野戦に従事することになったのである。

しかし、1950年10月に人民解放軍は決定的な打撃を受けるに至った。というのは、不注意にもマニラに置かれた共産党政治局および書記局が政府当局に急襲されて、その全員が逮捕されるという革命運動史上類をみない致命的な事件が発生したからである。もちろん、書記長ホセ・ラヴァもまた逮捕された。これはアメリカの支持によって任命されたマグサイサイ国防長官の劇的な成功を意味するものであった。そして人民解放軍を再建するための困難な会議が、1951年2月から3月にかけてラグナ州で秘密裏にもたれた。この中央委員会会議を指導したのは、ホセ・ラヴァの弟であり、同じく知識階級出身のヘスス・ラヴァ(Jesus Lava)、アレハンドリノおよびカステイリヨであった。かれらはこの会議で、アメリカ人ポメロイ(William J. Pomeroy)の理論的協力を受けることができた。すでにタルクはこの会議には実質的に参加しなかった。この中央委員会会議によって採択された1951年決議は、その前年の政治局決議を全面的に踏襲するものであった。すなわち、武力革命の確認がこれであり、新指導部は村落に「土地配分農民委員会」を設けて共産党と人民解放軍の勢力下にある全地域の土地再配分を指令するに至った。そして新しい党書記長にはヘスス・ラヴァが選ばれた。

一方、マグサイサイの武力掃討作戦は、1951年1月以来あらゆる地域において全面的に開始されるに至り、政府側は前年の共産党政治局急襲の成功に勢をえて攻勢に転じ、人民解放軍は守勢に追いこまれるに至った。政府軍の志気の高揚、軍紀の漸次的改善と反比例して、人民解放軍側の志気は低下せざるをえなかった。また打ち続く内戦にたいする民衆の倦怠・平和待望は、民衆の支持

を最大の武器とする人民解放軍側に、大きなマイナス要因となった。すでに当時人民解放軍側は、ルソン島東南部のシエラ・マドレ山中に追いこまれ、政府軍の封鎖作戦下の奇襲を避けて転々するといった、長期の困難な闘いに追いこまれていた。アメリカにおける景気後退の発生と、第3次世界大戦の勃発といった希望的観測も、空しく消え失せざるをえなかった。1951年以降のシエラ・マドレ山中における人民解放軍の苦難に満ちた闘いを、この闘争に参加したアメリカ人ボメロイは、かえって詩的ともいえる筆致で記録している (William Pomeroy, *The Forest—a Personal Record of the Huk Guerrilla Struggle in the Philippines*, New York, 1963. 木谷優梨子訳『密林のゲリラ部隊』, 理論社, 1967年)。

1952年9月、タルクは党の方針に反して単独で政府と民衆に平和の呼びかけを行なった。この行動がおもな原因となって、かれは翌年、政治局と書記局の職務を停止されることになる。さらにタルクは、その後、中部ルソンのアラヤット山中において一部の同志と語り、革命の情勢は衰退期にはいつていることを認め、新しい政策転換の必要性を確信するに至った。その結果、積極的に平和交渉を推進し、武装闘争から平和的な議会闘争に転換し、幅広い統一戦線運動を復活するという戦術上の転換を、1952年末に党書記局に上申した。しかし、この戦術上の転換は、けっきょく党書記局の受け入れるところとならず、かえってタルク兄弟は党書記局によって分派主義者、修正主義者、投降主義者の非難を浴びせられることになった。このためにタルク兄弟は、ひそかに単独で政府側と平和交渉を行なうに至ったのであるが、その結果、かれらは党書記局によって、あらゆる地位を剝奪されて、事実上追放同然の処罰を受けたのである。タルクは1954年初頭にマグサイサイ大統領の密使マナハン (Manuel P. Manahan) と秘密裏に接触し、大統領による恩赦の約束をとりつけたうえで、同年5月16日に政府軍に投降したのであった。タルクの場合、はたしてかれに投降以外の道が残されていなかったかどうかは、当時の党内外の情勢から軽々しく局外者の断定しえない問題であろう。

### III

タルクとその他共産党指導部との意見の不一致・対立は、たんに革命路線上の意見の相違にあっただけでなく指導体制のあり方についても存在した。これはタルクのことばによれば、マルクス主義的ヒューマニズム概念の

解釈とその適用をめぐる問題であった。1950年政治局決議の決定とその遂行にあたって、党は「スターリン的」指導体制をとり、下部にたいしては絶対的服従と「鉄の規律」を強制するに至った。この結果、たとえば故ケソン大統領夫人とその令嬢を襲撃して殺害するという「悲しむべき事件」が発生した。また「鉄の規律」の名のもとに、党への寄付金をわずか着服した者に対しても、たとえ、いかに革命運動に功労があったとしても、死刑を免れないという過酷な刑罰が定められ、そのためにタルクが個人的に知るかぎりでも6名の者が処刑された。解放軍に加わっていた幼い少年、少女がホームシックにかかって帰郷を申し出るとこれも処刑された。このような過酷な処罰の事例は、本書を通じて数多く出てくるのであって、はては友をもって友を、肉親をもって肉親を殺すことが、共産党員の名誉と考えられる事態までが発生していったのである。

一方、タルクはシエラ・マドレ山中の逃避行においても、小休止の時間をみつけては、部下のために野猪や鳥を撃つことに喜びを感じ、また野生の美しい蘭をみつけると、これを連絡員に託してマニラの知人に送り届けるという人間味豊かな性格であったが、しかしこのような行動は、革命の時間の浪費であり、冒険主義であるとして非難された。また若干の医学的経験をもっていたタルクが病人や負傷者を見舞って慰めることも、生命の危険を冒すものとして非難された。党の指導部の考えでは、このような行為は指揮官らしくない行為であり、人気とり行為にすぎなかったのである。しかし、タルク自身は一時仕立屋に勤めた経験を生かして、戦友の破れた衣類を繕ってやることに喜びを感じ、長期の危険な使命を果たしたあとで、部下に料理して食べさせることに無上の喜びを感じる人間であった。タルクが政府軍の手による愛妻リーサの殺害を確かめるために、襲撃地点の土を自ら掘って対面するくだりは、本書のうちでも、最も感動的な場面である。その描写には深い人間性がこもっている。ところで、このようなことが示すように、タルクは指導者であるまえにまず人間であり、指導者であるがゆえに、非人間的な態度(「ボルシェヴィズム」)は取りえなかった人間であった。そしてこのような立場と主張は、当時の党指導部(正確にはその多数派)には、とうてい認められなかったのである。かくてタルクの立場からすれば、「鉄の規律」の名のもとに導入された党指導部の集団指導制、民主集中制は、実態は指導部中の一部党派の集団指導制にすぎず、その手続きにおいてなんら民主的

でないところの中央集権であるにすぎなかった。かれはプロレタリアートの独裁は、一部「指導者の独裁」以外のなにものでもないと感じたのである。

そもそも、タルク自身はペドロ・アバド・サントス (Pedro Abad Santos) のもとで、社会党員として成長したのであって、根っからの共産党員ではなかった。1938年11月、情勢に備えてフィリピン社会党は、対立するイデオロギーを未調整のままフィリピン共産党と合同する (その結果、フィリピン共産党の名称に統一)。当時、すでに社会党の書記長であったタルクは、はからずもフィリピン共産党の指導者の1人となった。そして、この共産党の指導のもとに1942年フクバラハップ (抗日人民軍) が結成され、タルクはこのフク団の司令官に任命されたのである。かれの名はフク団の果敢な闘争と結びついてしだいに有名となった。しかし、かれ自身がどのように共産党員として理論的に武装することはついにできなかったのである。フィリピン共産党は、かれの名声を利用して、党のスポークスマンの役割をかれに負わせたが<sup>(注)</sup>、そこにタルク自身の悲劇が生まれる一つの原因があった。党指導部の指導体制にみられる「スターリン的」偏向、硬直性にも責任の一半を認めねばならないであろうから、そこに悲劇の原因のすべてがあったということではできないであろう。

それにしても、本書の内容はかれ自身の悲劇の告白といえるものであり、押し付けられた仮面の下からタルク本来のマスクを自らとり出したものといえるであろう。「虎に乗る男」という本書の題名はいささか奇妙な感じを与えるが、虎とはここでは共産党を意味している。社会党員であり、なによりも民族主義者であった人間が、共産党という虎に乗ったことから生ぜざるをえなかった悲劇という意味のようである。

(注) たとえば、タルクの名前を一躍国際的に有名にした前著 *Born of the People*, 1953 (安岡正美訳『フィリピン民族解放闘争史』, 三一書房, 1953年, として邦訳されている) は、共産党政治局の指令により、1人の友人の助力によって山中で書かれたものであることを、タルク自身明らかにしているが、さらにタルクによれば、帝国主義に関する章や、その他正統マルクス主義的傾向は、タルクの知らぬ間に挿入されたものであるという。なお、1人の友人とはボメロイであることを、ボメロイ自身が前出の記録 *Forest* (p. 102) のなかで明らかにしている。

## IV

現在タルクは、自己の信念がキリスト教的民主社会主義にあると述べている。かれはすでに獄中において、カトリックの洗礼を受けたのである。本書の序文を書き、またタルクを説得して本書を執筆するに至らしめたイギリスのクリスチャン、Douglas Hyde (かれ自身共産党員からの転向者) は、その序文のうちで「本書は共産主義から、キリスト教と民主主義への転向の物語であるのみならず、転向自体の一部である」と述べている。だがここで転向とみるのは、タルクの場合、文字どおりには妥当しないのではなからうか。タルク自身が述べているように、かれはけっして完全な無神論者にはなりきれなかったし、またイデオロギー的な共産主義者にもなりえなかったからである。もちろん、かれが共産党指導部の一員となって以来、無神論者、「ボルシェヴィキ」になりかかったことは事実であろう。しかし、かれは1948年から52年にかけて、党指導部多数派の偏向的やり方への疑問から、無神論、ボルシェヴィキの共産主義への寛容は弱まっていったと告白している。そして獄中において、実践活動からの孤立と正比例して、カトリックへの憧憬は甦り、深まっていったのである。

かれの獄中における幼少時の回想は、たえず故郷と、そしておそらくあらゆるフィリピン人がそうであるように、カトリック教会と結びついている。タルクのそれは故郷サン・ルイス町のカトリック寺院の姿と鐘の音に、日曜ごとのミサの思い出に結びついている。かれはサン・ルイス寺院を、中部ルソン全体で最高に美しいものと呼んでいるが、それは一つには、かれ自身がたえず死に直面していたがために、思い出のうちで浄化されてより美しいものとして浮かび上がってくるからであろう。ルイス・タルクの名前自体が、サン・ルイス寺院の守護神サン・ルイス・ゴンサガからとってつけられたものであるという。このようにして、タルクの胸中に長年閉ぢこめられていたカトリックへの憧憬は甦っていったのであって、ハイドのいうように、キリスト教への転向という表現は、かならずしも正しくないのである。

スペインは3世紀にわたる植民地統治において、ほとんど全島のフィリピン人を教化し、カトリック教会の庇護と支配のもとに置いた。よかれあしかれフィリピン国民の形成は、このように *under the bells* のもとに実現された。そしてカトリック信仰はフィリピン人の精神生活のどこかに抜きがたい痕跡をとどめたのである。この

点を過大に評価することもできないが、しかしまた過小に評価することも当たらないであろう。わたくしは1965年秋、日本人として戦後はじめて、タルクの生まれ故郷サン・ルイス町サンタ・モニカ部落を訪れたが、当時タルクの生家はすでに取りはらわれて、家の土台石のみが四隅に残されていたにすぎなかった。その下を流れる悠悠たるパンパンガ河のほとりに佇むとき、落日の残照にはえるサン・ルイス寺院の荘厳な姿に、しばし心を打たれざるをえなかった。このようなカトリック寺院の回想は、おそらく故郷を遠く離れたフィリピン人の胸中に幸福ないこのひとときを与えてくれるものであろう。わたくしはタルクが（カトリック教徒への）再生と書いたくんだり、それほど不自然なく理解しうるような気がするのである。

## V

タルクは、1913年サンタ・モニカの貧農の子供として生まれ成長した。それだけにかれの貧農にたいする同情と農民問題にたいする理解は、どの知識階級出身者にもまして深かったであろう。タルクが本書の最後に農民問題のための一章をさいたことは、かれに半生の闘争生活を強いたものがなんであったかを示している。かれは今日のフィリピンにおいて、さらに低開発諸国において農民問題の解決が最も緊急であることを指摘して、つぎのように述べている。「勇敢で民主主義的な運動がない場合には、革命はたえざる可能性として存在するであろうし、共産党員はそのためにかれらの仕事を容易にするであろう。共産党の指導したフクバラハップは撃破されたかもしれないが、革命的農民はしばらくの間は共産主義に背を向けているかもしれないにせよ、心底は戦闘的でありつづけるであろう」と。タルクは農民問題の解決のために土地改革の必要性を強調する。そして真に有効な土地改革は、たんに「上から」政府の有給職員によって与えられるものではなくて、「下から」、民衆の強力な民主主義的指導性によって行なわれるものでなければならず、またそれは権力によって妨害されてはならないというのである。だが、このように権力に楽観的な期待をもつことには、わたくしは大きな疑問を感じざるをえない。フィリピンのような社会経済的環境と政治権力構造のもとで、「下から」の土地にたいする要求運動が、はたして権力側の妨害なしに平和的に進められうるであろうか。タルク自身が経験したように、過去の歴史的事実はあますところなく、この道の不可能なことを実証した

のではなかったか。すなわち、「下から」の土地改革運動が権力側によって弾圧されたがゆえにこそ、そしてその弾圧は、武力をとともなうことをも辞さなかったがゆえにこそ、「下から」の運動もまた武装闘争の形態を強いられざるをえなかったのではないか。いま、タルクの考える「下から」の運動は、漸進的・改良主義的方法を意味するのであろうが、それによって真に徹底した改革がもたらされる条件が、今日の低開発諸国に、はたして存在しうるであろうか。権力自体が、それほど甘くないことは、タルク自身、マグサイサイ大統領との取引で身にしみて感じたところではなかったか。そして平和的な「下から」の道が存在しえないことを知りながらも、なおかつ、それに一縷の望みを託そうとするタルクの人間の弱さに、疑問を感じざるをえないのである。

## VI

本書は、タルクが死刑の宣告の可能性のもとで書きつづった手記であるから（その後、終身刑の判決が下された）、それだけにタルクの心中に屈折も多く、複雑なかげりと矛盾があり、心情の吐露にも一種の誇張をともしやすいことは避けられないところであろう。文字どおりの転向者の手記としてみることも多くの問題が残るのである。また、長期の獄中生活ののちに書かれたものであるから、観念的、理想主義的な面が強まらざるをえないこと、さらに過去の事実も当時の情況とは切り離されて評価される危険のあることも、読者は十分に留意すべきであろう。それにしても、タルクのこの手記は、戦後の一時期において隆盛をきわめたフクバラハップが急速に衰退していった内部的条件を、その渦中の人によって明らかにされたという点で、一つの有力な歴史的資料たりうることはまちがいないところである。

（調査研究部次長 滝川 勉）